

タイラギ (リシケタイラギ) *Atrina lischkeana* (Clessin)

【選定理由】

2009年版愛知県レッドデータブックには、タイラギとして以下に記す2種を合わせて準絶滅危惧種として掲載されていた(愛知県環境調査センター, 2009)。環境省第4次レッドリストでは、横川(1996)の研究結果に基づき、従来タイラギとされていた種には2種が含まれていることを採用し、ズベタイラギ *Atrina pectinata* (Linnaeus)、タイラギ(リシケタイラギ) *A. lischkeana* (Clessin)の2種として掲載された。本書でもこれに従い2種として扱う。個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県では、内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部の渥美湾で海水浴客が誤って踏んで足をけがするほど多産した(愛知県科学教育センター, 1967)。しかし、近年三河湾奥部では死殻すら採集できない。三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種となっているが、その量は年々減少している。将来的に絶滅危惧に移行する危険性がある種と評価された。



渥美半島伊良湖沖(トロール漁), 2005年5月19日, 木村昭一採集

【形態】

殻長25cmを越える大型種。殻は茶褐色で、やや薄く脆い。殻は長い三角形で、多数の低い肋が走り、多数の強い鱗片がある。従来“タイラギの有鱗型”と呼ばれていた種で単にタイラギとも呼ばれる。三河湾湾口部ではズベタイラギの方が大型になり、漁業対象として多く採集されている。貝殻中央部の貝柱は大きく美味で、高価に取り引きされる。

【分布の概要】

【県内の分布】

三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種として採取されている。本種はズベタイラギより外洋側に分布が偏る。名古屋港沖からはズベタイラギのみが採集された(木村, 2010)。三河湾湾口部でもズベタイラギの個体数が遙かに多い。渥美外海の浅海で操業する底引き網によって、本種の幼貝から若い個体の殻が大量に採集されることがあるが、生貝は少ない。

【世界および国内の分布】

日本以外での生息状況は不明。国内では、本州から九州の内湾から湾口部にかけての低潮線から水深30mの砂泥底に分布する。瀬戸内海以西ではズベタイラギより生息地が多い傾向がある(山下・木村, 2012)。有明海での漁獲では本種が圧倒的に多い。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の干潟から潮下帯の砂泥底に、殻の後縁の部分を出した状態で大部分が埋もれて生息する。殻前部の足糸口からでる足糸を底質中の礫等に付着させ、かつ深く埋没しているため、掘り出すのは容易ではない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の生息状況については、【選定理由】の項参照。上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているため、本種の生息場所、生息数とも減少している。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。また本種は重要な食用種なので、漁獲圧による資源量の減少も無視できない。詳細な資源量の調査に基づく適正な漁獲と資源管理が不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp.
木村昭一, 2010. タイラギ, p. 213. in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
山下博由・木村昭一, 2012. リシケタイラギ, p. 114. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
横川浩治, 1996. タイラギ2型の遺伝的分化. *Venus*, 55: 25-39.

【関連文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第34報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)